



## 明日を切開く機械工学科

(委員長) 後援会 機械工学科 (学科長) 船崎 健一

工学部後援会の皆様に機械工学科の活動状況をご報告する機会を得ましたこと、大変嬉しく思います。ご存知のように、機械工学科は昭和14年の盛岡高等工業設立当時から存続する伝統と実績のある学科であり、これまでに数多くの卒業生を輩出しております。それぞれの方が企業や大学、社会などの中核で活躍されてあり、今後も機械工学科が人材育成や研究活動を通じて社会に対して果たすべき役割は大きいものがあります。機械工学科の運営に携わるものとして、諸先輩方に負けない優れた人材を育て、今後とも機械工学科を維持発展させていくに励心しておりますが、昨今の大学を取巻く社会情勢は劇的に変化しており、大学のあり方自身から機械工学科の教育方針や方法までも、大幅な見直しの必要性を感じております。

大学が導かれている変革の嵐の本質は一体何でしょうか？平成16年度からの国立大学の独立行政法人化、競争原理・評価システムの導入、教職員の非公務員化、少子化、どれを挙げても、大学人にとってはある意味今まで込んだ事もない「劇業」ではありますが、私はこれらの変革の本質が、「国立岩手大学の存在理由」であると分析しております。私達岩手大学の教職員は、大学は空気の如く当たり前存在し、岩手大学は岩手山の如く岩手の地に存在し、国は当然岩手大学を財政的に支援するもの、とは考えていなかったでしょうか。岩手大学での教育プログラムは、誰を責任者として、誰に、どのような教育を、何を目標に行うものなのか？教育機関として当たり前の議論が、ともすると疎かになってはいなかったでしょうか。財政危機に端を發した今回の大学改革ですが、私はこれを岩手大学、工学部や機械工学科のあり方を再考し、それぞれが教育研究機関、組織としての確固たる地位を再び確立するための好機と捉えております。

いささか前置が長くなりましたが、上記のような思索を機械工学科に振向けた場合、今後の機械工学科のあり方がおのずと見えてきます。それは、①機械工学を学ぶことの明確な目標と興味された方法を有する教育プログラムの立案とその実施②基礎と応用、先端と実用のバランスがとれ、地域貢献にも十分配慮した研究をタイムリーに実施するための学科内体制の確立とそれらの成果としての優れた研究の遂行③学生の自主性を育み、講義の枠を超えた広範な学習への意欲を引き出し、かつ社会性、倫理観を身に付けさせるための学習プログラムの立案とその実施④効率的・効果的な学生の生活指導、進路指導、就職活動支援体制の確立と施行⑤教育研究体制や教員自身を点検評価し、改善するためのプログラムの立案とその実施、などでしょう。これらの総合的な議論は今後科内で継続的に行われることになると思いますが、議論の結果を待たずとも今からでもできる改革を行う事も重要です。機械工学科では、改革の前倒しとして、次のような新たな取組みを開始しました。

- ① 学科内措置として平成14年度から3大講座制を発展的に解消し、新たに6つの研究部門制を導入しました。これとともに、教官個人の独立性・自由度を高め、プロジェクト型研究への学科としての対応制を向上させました(具体例：学科内の教官を中心とした金型関係のプロジェクトが立ち上がり、岩手県内の企業等の連携で新しい金型技術開発が進められております)。
- ② 8への教育グループと呼ばれる、学科のカリキュラムと教官の適性に合わせた教科責任体制を導入しました。
- ③ 3年次で社会での実作業を経験してもらうためのインターンシッププログラムを開始しました。また、外部からの講師の方もお招きしての特別講義も一層の充実を図りました。
- ④ 厳しい経済状況の継続に伴う雇用情勢の悪化に対応し、学力だけでなく社会性に富み魅力ある人となるためのキャリアアプ担当(就職支援担当)の活動を従来よりも半年早めました。

この他にも、J ABEEと呼ばれる、国レベルでの教育プログラム認証制度への対応を鋭意進めております。学科の現況をお話しましょう。学科のスタッフは、教授10名、助教授5名、講師4名、助手6名の合計25名から成り、これに技術部から10名の教育研究支援スタッフの派遣を仰いでおります(スタッフサイズ、学生定員数はともに工学部最大級です)。平成14年度には若い教官の採用が相次ぎ、学科内が活気づくとともに、教育研究活動も一段とレベルアップしています。学部から大学院への進学は、毎年30名～40名にも及び、学科・専攻における研究活動への重要な力となっています。就職状況も、製造業を中心とした国内産業の不振などという悪条件にも関わらず、堅調な就職率を維持しております。ただし、就職先などを総合的に分析すると、油断できない状態であり、一層のケアが必要でしょう。これに関して嬉しい話としては、学生が自発的に就職支援活動への応援を申入れてくれたことです。学生の行動力は教官の比ではなく、彼らのパワーを如何に学科の運営に活かしていくかを考えることも、今後の重要な課題でしょう。

大学にも、またその内部の学部、学科、さらには教官個人に対する厳しい峻別の時代が参りました。まずは教官個人の能力向上の努力が重要でありましたが、組織力も一段と高めしていく必要があります。機械工学科はそういったにも積極的に取組んでおり、後援会会員の皆様のご期待に必ずお応えできるものと思っております。今後とも、ご支援ご鞭撻の程宜しくお願いします。